

# 幼児の評価について

## 感じること



吉田三紀子

朝の仕事が一段落して、ふと庭の郵便受けに見なれた封筒をみつ  
けました。そして思ったとおり久し振りに編集部よりの原稿御依頼  
に私は一瞬居眠りしていた肩を叩かれたような妙な気持ちになりまし  
た。幼児教育の仕事の退いて、家庭に入ってからの不勉強を叱られ  
たような妙な気持ちでした。思わず考え込んでしまった私の顔を、積  
木遊びに興じていた長男の雄三（一年三か月）が心配そうにのぞき

込み「ママバァー、ママバァー」としきりに注意を引こうとしてい  
ます。雄三もいつの間にか成長し、私のこんな小さな心の動きにも  
気をとめるようになったのかしらと驚き、これはのんびりしてい  
られない、これからは母親の立場として子どもの成長に遅れないよう  
勉強しなければと思いました。原稿の御依頼をお受けしようと思  
っていたのもその時でした。しかし小さな殻の中で自分の子どもだけ  
を見て暮してきた私の考え方は、果して現在の社会に通用するでし  
ょうか。独りよがりになっていくかも知れません。弁解はやめまし  
ょう。良悪は別として、すべての子どもたちの幸せを願うある母親  
の意見として御批判いただければ幸いです。日々の生活の中で耳に  
し経験したことをただ感じたままに……。

私のいただいたテーマは幼児の評価についてです。実はお恥ずか  
しいことですが、評価ということばのひびきに私はある種の恐怖感  
のような不快な思いを味わいます。そして二十数年の人生で評価さ  
れることにいさか疲れたようです。やや解放されたはずの現在で  
も、私は高校時代の試験風景を夢にみる必要があります。人間は生  
まれた瞬間から体重計にのせられ、標準値と比較されます。幼稚園  
では一生懸命描いた絵もはり出してもらえなかつたり、小学校・中  
学校とその評価はますますきびしくなってきました。学業成績は仲間  
集団の中で地位まで決定づける要素ともなるようです。更にその  
上家庭での評価がそれに加わります。このように私が経験しただけ  
でも医師・保母・教師・両親・仲間といろいろな人による評価があ

り、その方法も内容も多種多様でした。何故こんなに試めきれなければならぬのかしらといつも考えたものです。従来の教育は指導のし放しだったとよく言われます。評価についての研究があまりなされず、内容も方法もあまり望ましいものがなかったために、評価をいやなものと感じていたのかも知れません。それに比べ現在教育の場において評価という問題に強い関心がよせられていることは街の書店の状況にもはっきり表われています。知能テスト、学力テスト、適性テスト、性格テストとその種類は多く、幼児用の絵本の中にも知能テストをとり入れたものがあるようです。そしてこれらのテストペーパーはさまざまな評価目的をそれぞれ人間を全体的に評価しようとする傾向の強いことがわかります。いろいろな面から評価することによって一人の人間をより正しく把握することができ、よい教育を行なうためにはぜひとも必要なことだと思います。

○◎大学心理学教室発行、○◎研究所発行といったように、研究され実験されそれぞれ年齢にふさわしいテストペーパーが作られているようですが、これらの使用方法について最近疑問に思うことがあります。自分の年齢よりも高い年齢を対象としたものを使用するのが常識のようになっていたり、あるいはテスト慣れするために、片っぱしから手あたり次第に使用する傾向がみられます。人間を評価するにはいろいろな方法があります。観察法、面接法、テスト法などのようにそれぞれ特徴をもち、使用法さえ間違わなければいろいろな組み合わせることによってほとんど評価の目的は達成できるのでは

ないでしょうか。しかし現在テスト法にもっとも重点がおかれ学校はともかくも、その傾向が幼児の生活の中にもまで影響し、幼稚園においても家庭においても異常なまでのテスト熱が流行しているように思えて仕方ありません。

私は毎週六才になる史子ちゃんの家にはピアノをお教える約束でお伺いします。年長組になってからの史子ちゃんの生活は非常に忙しいものになってしまい音楽の楽しみは二の次で、ともすれば幼稚園でのテスト結果についての話になります。彼女の机の上にはいろいろなテスト用紙がおりてあり、○◎指数○◎偏差値とむずかしい評価基準が示されています。ある時知能指数60という結果におどろき相談に行ったところ、クラスでは上の部で心配ないと笑われたこともあったそうです。このような知能テストがたびたびある上に毎日午後は課外補習のようなものがあり、その学習結果が、道徳90点、数量70点、時計50点といったように連絡帳に記されています。「時計50点てなあに？」とたずねますと「何時かあてるの、本当は70点なの、声が小さいからだめだったの、ママが教えてくれなから……」なるほど連絡帳には家で時計の見方を教えるようにと注意書きがあります。むずかしい数量の問題に親子で泣きたくなったり、通園をいやがることもしばしばということです。こんな様子を見てみると、この上ピアノのレッスンなどとてもかわいそうで、近所のお友だちと一緒に思いきりリズム遊びで気晴らしをしてしまったりします。史子ちゃんのお母さまは「熱心な先生には感謝して

いますが、毎日いろいろなむずかしい点数をもらってくる子どもをどのように扱ったらよいか困ってしまう」とおっしゃいます。これが望ましい幼児の生活でしょうか。この例は決して珍らしいものではありません。私のめいも一年保育である幼稚園に通っています。四月に入園し五月から課外補習、学期末テストに加えて二学期から週三回、三学期から週三回のテストがあるそうです。ほとんどはペーパーテスト、時々面接テストもあるそうです。その内容は読み書き、作文から加算減算掛算割算に到るまで、テスト結果には順位がつけれられ参観日に発表、その結果家でしっかり教えるように言われるまでもなく家庭での学習がより熱心に行なわれるようです。

可愛想で仕方がないが一人だけ放っておくわけにもゆかないというのが母親の感想です。しかし大学附属などの有名校に入ってきたえおけばあとは無試験でエスカレーター式魅力という力は強く、「そのためには受験勉強も仕方がない。でもそのおかげで小学校三、四年位のこととはほとんどできる」とまんざらでもないようすの人々も、少なくないようです。しかし子どもがかわいそうだという気持は誰も捨てきれない様子です。私の子どもはまだ一才半足らずですが遠からず幼稚園にも通うことでしょう。その時私自身どうするかしらと考えると何だか怖くさえなってきました。それにしても何故こんなにテストが必要なのでしょう。練習をすることによって知能指数がふえた喜び、これはたいへんな間違いで、いかにその知能テストがあてにならないかを示すものではないでしょうか。それにして

も、彼女たちはいつ遊ぶのでしょうか。幼児の生活は遊びです。しかし、疲れきって帰宅する子どもたちは嬉しいはずの両親との外出さえ好まなくなり、無気力にテレビをみて過ごすそうです。聞けば聞くほど驚くことばかり、幼稚園は教育の場というより、評価専門の場のような錯覚さえおこします。

幼稚園といえば、暖い家庭から飛び立ちはじめてひとりで降り立った社会です。その小さな社会の中には思わぬむずかしいルールがあり、それを仲間との自然な遊びの中から学びます。それが将来もつと広い社会にも適應するための大切な準備行動でもあるのです。登園の道あるいは園庭などで美しい自然を観察し、自然のふしぎな力を知る。仲間同志の会話から、話し方、聞き方を学び、集団の規則正しい生活の中で基本的生活習慣を身につける。集団の中で遊びを通して経験することは、どんなに上手に教え込まれるより効果的に身につくものだと思います。これだけでも、はじめての社会で経験するのは幼児にとりたいへんな課題だと思えます。しかし現在は先に述べたような状態であり、小学校一、二年の学習を課題とするのは常識のようです。もちろん何ごとも早くできるに越したことはありません。しかしそれは正しく教育され、正しく理解されているのでしょうか。小学校の先生方はこのような現状をどうお考えでしょうか。新しく教育することに比べ、再教育は非常にむずかしいと言われます。幼稚園と小学校は常に一貫した考えのもとに教育計画が作られるべきだと思えます。

それにしても現在のこんな幼児の生活態度を好ましいと思っている人は少ないようです。では、誰も望まないような傾向がなぜ流行のようになるのでしょうか。社会の流れに自分だけとりのこされる不安感と幼児教育への熱心さが合い重なり、ますますこのような傾向を強くしているのではないのでしょうか。しかしこの悪循環を放っておくわけにはいきません。被害者は人生の中で人格形成の一番重要な時期にある幼児自身です。私たちはいま一度幼児の望ましい生活のあり方を考えるべきではないでしょうか。その上で幼児の評価のあり方を検討すべきだと思います。

ある書物に「評価とは保育者の指導によって施設の保育計画に基づく目標が幼児、児童に到達されつつある程度を示すものである」と定義づけられています。これは保育施設のみならずどんな教育の場においても同じことが言え、正しい教育目標がどのように伝わっているかを確かめるのが評価の役割であり、教育の大切な一つの機能として考えられるものです。よい教育を行なうためには、教育するものも、されるものもいろいろな面で評価されるべきだと思います。評価の目的は、指導効果の判定のみならず、指導計画・指導方法の改善、そして更に自己評価による自発性を養うところにあり、「テストをしないと勉強しないから……」とよく言われたものですが、これは最後に述べた自己評価による自発性を養うところに重点がおかれているようです。幼稚園でのテストもこのような目的でた

びたびおこなわれているのでしょうか。しかし幼児がテストの点数による評価で果して正しい自己評価ができるでしょうか。自己評価が正しくできないものにそれをしているのは無意味であり、またそれ以上に危険なことだと思います。

幼児には幼児にふさわしい教育があります。と同時に当然それにふさわしい評価があるはずです。教師の指導計画や実施の方法を反省し改善するための評価が現在のように幼児の大きな負担になっては害はあっても利にはなりません。幼児自身の生活をさまたげず、より自然の姿の幼児を評価する方法はないのでしょうか。

私はこの原稿をずいぶん苦しい思いをして書いています。というのも私に全く自信のないことだからです。長い間勉強をきめこんでいた私には、昔とったきねづかで生意気なことは言えても学問的裏づけのない、いい加減なことになってしまいます。幼児の生活から離れてしまっている今、幼児教育を論じるのはいへんおこがましいような気持です。学生時代、一生を幼児の研究にと意気こんでいた頃の恩師の一言が忘れられません。「文献より、調査よりまず観察」その時はふくらんでいた胸がベシヤンコになったような気持ちでしたが、そのことが、保育施設に勤めていた頃の目標となり、家庭に入り家事、育事に追われる現在も私の頭から離れないものになりました。

三月十五日 早春らしい暖い日、雄三は散歩の途中、四匹の仔犬と母犬をみつけ大声をあげて遊ぶ。

四月 二日 テレビ番組「うたの絵本」がはじまると歩行器をひっぱって必らずやってくる。

六月十日 二、三日前からおむつがぬれると泣いて知らせる。

八月十七日 伝い歩きがすっかり上手、糸まき、ピンポンなどお気に入りのおもちゃをタンスとふすまの間にそっと入れる。

十月二十日 カラスの泣声をききアーアーとまねる。そう言えば掃除機のモーター音をまねてか、部分品などをもち出しブアーブアーという。

この観察記録は家計簿のすみの余白に、一日の様子をパパに報告しながら書いたものです。昨年八月末に生まれた雄三は今猛スピードで成長しています。育児書を聞く余裕はありません。毎日変わっていく雄三を一步先に立って手をひけるのはこの観察記録のおかげです。いいえ、正確に言えば一步遅れながら、かろうじて母親の威厳を保っている場合も多くあるありますが、ともかく、観察することによって、おむつをはずす時期、スプーンをひとりでもたせる時期、衣服をひとりでぬがせる時期、絵本を与える時期、その内容、その他投げるおもちゃ、ひっぱるおもちゃ、大きいおもちゃ、指しきをつかうおもちゃ、これらのおもちゃを自分で入れられる箱、といった具合に雄三自身の行動から、どんなものをおもちゃと

していつ与えるか、生活習慣がどのように身についているかを知ることが出来ます。ただ観察するだけでなく、ほんの少しの努力で記録しておけば、ものごとを冷静に考え直すことができ、一歩さがって絵をみるように子どもを全体的にみることも出来ます。これは単に私の家庭での問題にすぎません。そしてまだ小さい乳児の例でもあり、テーマの幼児の評価の問題を論ずる際には不適當な例だったかも知れません。が、乳児幼児を問わず、まず基本になるべき重要なことは観察ではないでしょうか。現在、テストばかりに頼りがちの幼児の評価の問題も、いまま少し母親と保母が、幼児自身を観察し、その姿を知るならば解決できる問題ではないでしょうか。観察による評価をもっと重要視すべきだと思います。観察はいつどこなどころでも出来ます。幼児のありのままの姿を評価することも出来ます。評価は幼児のありのままの姿を知るところにもっとも大切な意味があり、精神的に緊張しすぎていたり、鉛筆をもつことの方がむずかしいような場合の結果を評価することはよほど考えねばならないと思います。もちろん観察だけでは評価をする人の主観が入り、完全とは言えません。そこでテスト、面接とそれぞれの長所をうまく組み合わせ、できるだけいろいろな面から幼児を全体的に評価しなければなりません。常に幼児をよく観察しながら、評価そのものが幼児の生活のきまたげにならないよう心がけ、よい評価がよりよい教育への刺激となるようにしなければならぬと思います。